

第二回星野立子新人賞

「飛沫」

馬場公江

梅東風のいろ撮れぬなら詠めばよし
気づかるる前に治りぬ春の風邪
恋猫もそろそろ腹の空く頃か
海沿ひの貸自転車屋つばくらめ
いつせいに蝶の噴き出す垣根かな
囀や寝転ぶによき草の丈
ひこばえと言へば唇こそばゆく
沈丁の匂ひはりつく喉の奥
落書きのもう色褪せて蔦若葉
猫の子の何に勝負を挑みたる
返事まだ書く気にならずシクラメン
かさがさかさがさと躑躅の咲き始む
タンクローリー洗ふ飛沫や夏に入る
花は葉に性格てふは獣にも
占ひも天気も外れ新茶汲む
石階の雨に黒ずむ薔薇の園
薔薇剪伝薔薇失ひ死茎残る
夏草や風を追ひ越す人の影
今朝もまづ見る蜘蛛の巣の出来具合
父の日の気遣ひ無きにしも非ず
夜濯の足もとを猫戻りけり
サイクリングロードを蛇や轢きさうに
ドア重く窓開けづらく夏館
後ろから猫も覗きぬ冷蔵庫
乾かざる洗濯物とおしろいと

近所みな出払つてゐる木槿かな
褪せて地の色に近づく曼珠沙華
木犀やいつから開けつ放しの戸
旅先のやうな眼差し翺雲
秋晴やきのふ描きし樹を仰ぎ
小鳥来るアイロン不意に軽くなる
木と触れてみれば鉄柵秋深し
さざなみをはるかに色を変へぬ松
十月や汀に映る字の読めて
木には木の雲には雲の冬来る
円らかに掃き寄せ寺の落葉かな
雨音のつる湯船や翁の忌
ひた走る鳩の後ろを七五三
散るを忘れて干涸びて冬紅葉
切株のみづうみへ向く時雨かな
飼主にてこずる獣医冬ぬくし
広がりも狭まりもせず冬木道
裸木や爬虫類めく紐吹かれ
風邪の手の取り落としたる絵筆かな
旧家とは思へぬ柄の干蒲団
ゆふべ雨降りしか光る冬木の芽
病む猫と意の通じ合ふ霜夜かな
初旅や見下ろす景に街と町
寒鯉のしづかに池を抉りけり
待春のとりあへず買ふ植木鉢